



若山 千春

WAKAYAMA CHI HARU

1982年 柏崎市出身

2017年 第43回東京展絵本部門マーベラス賞受賞

2018年 おおしま国際手づくり絵本コンクール入選

第21回日本自費出版文化賞グラフィック部門入選

高柳町の門出和紙に布絵を貼り、懐かしい地元の昔語りでも物語が展開していく創作布絵絵本『じいさまのぜんまい採り』。これは、高柳町出身の父が地元の方言を入れて創作した物語を母が語りべとして活動していた昔ばなし。その昔語りを基に、娘の若山千春さんが創作画家として布絵本に仕立てあげたものだ。ほのぼのとした楽しいストーリーと、型紙などをほとんど使わずに作られたという布絵の風合いは優しく温かみにあふれた作品に仕上がっている。

「子供のころから絵を描くことが好きだった」と話す若山さん。中学2年の頃、絵手紙を習っていた母の絵の道具を借り、日本画用の顔彩で初めて描いたさつまいもの絵を彼女は今も大切にしている。10代のころは自分の思いをうまく伝えられず、自分の内面や本当の気持ちを知る手段として白い紙に向かい、心の思うままに、色を重ねるように描いていた。その絵を見つめながら、自分は今どんな気持ちなのか、これからどのような道に進みたいのかと心に問いかけ、心を整えるために絵を描いていた。描くことは自分

との対話だったと、その頃の自分を振り返る。

京都の外语大学に進学した若山さんは、興味をもっていたユニセフや国際協力の分野に関連するサークルに関わり、募金活動を行って貧困により劣悪な環境に暮らす人々に住まいを提供する、国際NGOハビタットの活動を積極的に行っていた。また、絵が得意な若山さんに絵本作りを提案した大学の先生が絵本サークルを立ちあげ、若山さんが中心となって初めて制作した、クメール語（カンボジア語）と英語、日本語の3か国語の絵本を識字率の低いカンボジアに送るといボランティア活動も行ってきたという。若山さんは、様々な団体や知り合いに声を掛けて寄付を募り、観光客の多い京都の祇園で何度となく募金活動も行った。カンボジアでは障がいを持つ子供や虐待を受けたり身寄りのない子供たちが暮らす施設でボランティアを行い、タイではレンガで家を作る活動も行った。大学卒業後はフェアトレードの会社でインターンシップとして働いた後、カレンダーやTシャツのデザイナーとして絵に関わった。

その後、柏崎で再び少しずつ絵と関わるようになり、2年前布絵に出合ったことから『じいさまのぜんまい採り』を創作しコンクールに入選。続編の『ばあさまのぜんまい採り』も完成した。両親が大切に育ててきた昔ばなしを多くの人に見てもらえる『かたち』にできた喜びは大きかった。

現在、新しい絵本の制作に向けて活動する若山さん。彼女の描く絵や作品に魅了された人々たちとの出会いは大きな力となっている。



*出版本『じいさまのぜんまい採り』『ばあさまのぜんまい採り』についてのお問い合わせはかわらばんまで。